今、思うこと

助産学専攻科５期生　内　田　瑠里子

2001年４月からの１年間は、私にとって１番楽しかった時期といってよいだろう。

入学した４月は、年齢も違う、経歴も違う、しかも人数が少ない、こんな中で友達ができるのだろうかと少し憂鬱になったのを覚えている。とりあえず助産師になれるように勉強だけは頑張るか、と思っていた。ところが、この年齢も経歴も違う人たちってなかなかおもしろい！と気付くのは早かった。みんな個性的でその個性がそれぞれに輝いている。パワフルで団結力があってノリのいい仲間がいてくれたからこそ、助け合い、学び合い、笑い合えた充実した１年だった。

初めてお産に立ち会った時、任せてくれる産婦さんに応えようと、どうしたら楽に過ごせるだろうと工夫したり、教科書を真剣に読んだり、お母さんと赤ちゃんだけに集中し、関わった。あれほどの緊張感の中で、無事に赤ちゃんが生まれてきた時の安堵感、感動は忘れられない。実習は、莫大な量の記録やお産があれば、時間に関係なく呼び出されるというハードなものだ。思い返せば、病院の更衣室で半分寝ながら朝までかかって記録したことや、夜中呼び出されて飛び起きて病院に行ったのに、すでにお産が終了していてものすごくショックだったこととか…。かなりつらい思い出もあるが、その時はすごく必死にみんなで一生懸命になっていた。だから、つらいというより今思い出しても笑えてくる位、精一杯頑張ったという達成感と満足感でいっぱいだ。あの頃の思い出は今でも私の原動力となっている。

今回の新潟県中越地震により、私の病院も被害を受け、お産ができる状況ではなくなった。お産や赤ちゃんから離れてみて、とても寂しく、自分自身すら見失いそうだった。その時、助産学生だった１年間のことや助産師をめざした理由、助産師という仕事、などをゆっくりと考えてみた。命の尊さ、強さ、はかなさを感じ、そして生命の誕生の瞬間に立ち会えたり、人生のビッグイベントである出産に一緒に加えてもらえたりする助産師ってすごい仕事なんだ、今までしていたことはすばらしいことだったんだ、と離れてみて改めて分かった。また、私自身も多くの人に助けられ、人々の優しさ、温かさに触れることができ、大きな感謝の気持ちを持てた。今は早く元に戻って、少しでも産婦さんや多くの皆さんの役に立ちたいと思っている。

日々１日１日の大切さを知り、これからも助産師としての誇りを持って、たくさんの命に関わっていきたい。新潟県立看護短期大学での学びや思い出を胸に、初心を忘れないでいたいと思う。